50年代のカウント・ベイシー楽団の人気シンガーと個性派トランペッターが意気投合。コンボ編成で渋い歌を聴かせた楽しい共演盤。

WPCR-29197 国内初CD化 歌詞付 [ROULETTE]

□ **ジョー・ウィリアムス&ハリー・スウィーツ・エディソン『トゥゲザー』**

[1]ウィンター・ウェザー／[2]アイ・ドント・ノウ・ホワイ(アイ・ジャスト・ドゥ)／[3]ゼアズ・ア・スモール・ホテル／[4]アウト・オブ・ノーホエア／[5]アーント・ユー・グラッド・ユーア・ユー／[6]リメンバー／[1]トゥゲザー／[7]ディープ・パープル／[8]オールウェイズ／[9]ラヴァー・カム・バック／[10]セント・メリー河にて／[11]アローン・トゥギャザー

ジョー・ウィリアムス(vo)、ハリー・スウィーツ・エディソン(tp)、ジミー・フォレスト(ts)、サー・チャールズ・トンプソン(p)、トミー・ポッター(b)、クラレンス・ジョンストン(ds)、アーニー・ウィルキンス(arr)

1961年1月31日、2月1日、2日　ロサンゼルス

カウント・ベイシー楽団のスター歌手だったジョー・ウィリアムスが独立して間もなかった頃、やはりベイシー・バンドのスター・ソロイストだったハリー・エディソンを迎えて吹き込んだアルバム。ふくよかな温かさをもつジョーの歌声に、"スウィーツ"のニックネームをもつエディソンのトランペットが絡み合って、ごきげんな雰囲気が醸し出されてゆく。深い懐をもつ両者の音楽性に、あらためて感嘆させられる好アルバムになっている。

ルーレットにおける通算6枚目の作品は、1963年12月、39歳の若さで旅立った不世出の歌姫の追悼盤。1962年3月から1963年10月にかけて行われた複数のセッションから、選りすぐりの名唱12曲で構成されたアルバム。

WPCR-29198 国内初CD化 歌詞付 [ROULETTE]

□ **ダイナ・ワシントン『イン・トリビュート』**

[1]ザット・サンデイ、ザット・サマー／[2]アイヴ・ラン・アウト・オブ・リーズンズ／[3]サムシングス・ゴット・トゥ・ギヴ／[4]ファニー・シング／[5]ゼイ・セッド・ユー・ケイム・バック・ランニング／[6]リンガリング／[7]ザ・グッド・ライフ／[8]スターズ・オーヴァー・マイ・ショルダー／[9]アイシー・ストーン／[10]コール・ミー・イレスポンシブル／[11]メイク・ビリーヴ・ドリームズ／[12]ロード・ユー・メイド・アス・ヒューマン

ダイナ・ワシントン(vo)、フレッド・ノーマン、マーティ・マニング(arr)

【録音】1962年3月、9月／1963年10月　ニューヨーク

1963年の暮に39歳という若さで突然に世を去ってしまった、偉大な歌手のダイナ・ワシントン。これは死の翌年にリリースされた彼女の未発表セッションである。ナット・キング・コールが歌って話題になった〈ザット・サンデイ、ザット・サマー〉をはじめ、すべての曲がダイナ独自の個性とともに大きなスケール感をもって歌われる。あらためてダイナ・ワシントンの死が惜しまれるような、聴きごたえのある一作である。

名盤「ヴィレッジ・ゲイト」のライヴに続くコルピックスでの通算6枚目のアルバム。有名・無名のエリントン・ナンバーを情感込めて歌ったニーナの傑作

WPCR-29199 歌詞付 [COLPIX]

□ **ニーナ・シモン・シングス・エリントン**

[1]ドゥ・ナッシン・ティル・ユー・ヒア・フロム・ミー／[2]アイ・ガット・イット・バッド(アンド・ザット・エイント・グッド)／[3]ヘイ、バディ・ボールデン／[4]メリー・メンディング／[5]サムシング・トゥ・リヴ・フォー／[6]ユー・ベター・ノウ・イット／[7]アイ・ライク・ザ・サンライズ／[8]ソリチュード／[9]ザ・ギャル・フロム・ジョーズ／[10]サテン・ドール／[11]スイングしなけりゃ意味ないね

ニーナ・シモン(vo, p)、ウィズ・ビッグ・バンド、ストリングス、ザ・マルコム・ドッズ・シンガーズ(chorus)他

【録音】1962年　ニューヨーク

多くのエリントン・ソング・ブックの中にあって、本作はとびきりの魅力をはなつ一枚といって良いものだろう。多様な音楽的バック・グラウンドをもっているニーナ・シモンならではの独特なエリントン解釈。名作だけでなく〈ヘイ、バディ・ボールデン〉〈メリー・メンディング〉をはじめとする珍しいナンバーが多く含まれているのも魅力。エリントンを素材に、ニーナの個性がくっきりと浮き彫りになってゆくのが素晴らしい。

ベニー・カーターの編曲で情感豊かに歌った隠れた秀作。ペギー・リーの「ブラック・コーヒー」に通じる表題曲をはじめ、悲しいバラードだけでなく、恋愛の明るい歌も取り上げ、サラの魅力が横溢。

WPCR-29200 国内初CD化 歌詞付 [ROULETTE]

□ **サラ・ヴォーン『ロンリー・アワーズ』**

[1]ロンリー・アワーズ／[2]アイル・ネヴァー・ビー・ザ・セイム／[3]イフ・アイ・ハド・ユー／[4]フレンドレス／[5]ユーア・ドライヴィング・ミー・クレイジー／[6]オールウェイズ・オン・マイ・マインド／[7]ルック・フォー・ミー、アイル・ビー・アラウンド／[8]ホワットル・アイ・ドゥ／[9]ソリテュード／[10]思い出のたね／[11]私の彼氏／[12]ソー・ロング、マイ・ラヴ

サラ・ヴォーン(vo)、ベニー・カーター・オーケストラ

【録音】1963年6月12~14日　ロサンゼルス

サラ・ヴォーンの円熟したバラード表現の魅力を、たっぷり味わうことのできる63年の作品。恋を失ったやるせない気持ちが、あますところなく表現される〈ロンリー・アワーズ〉。他の曲も、たっぷりした情感とともに豊かな表情で歌いこなしてゆくサラ・ヴォーンが、とても素晴らしい。まさに、ため息が出るほどの上手さ！ベニー・カーターのアレンジになるオーケストレーションが、そんなサラの歌声をやさしく包み込んでゆく。

TOP10 OF JAZZ MASTERS COLLECTION 1200

対象:第3弾～第4弾
(50タイトル)

1

WPCR-29105 国内初CD化
ソニー・スティット
『ソニー・サイド・オブ・スティット』

2

WPCR-29141 国内初CD化
ジョニー・スミス
『フェイヴァリッツ』

3

WPCR-29128 国内初CD化
ハリー・エディソン
『パテンテッド・バイ・エディソン』

4

WPCR-29119
エセル・エニス
『ララバイズ・フォー・ルーザーズ』

第5位
WPCR-29125
ビヴァリー・ケニー シングス・ウィズ・ザ・ベイシー・アイツ

第6位
WPCR-29103 国内初CD化
ディジー・ガレスピー&チャーリー・パーカー
『イン・コンサート』

第7位
WPCR-29124 国内初CD化
サラ・ヴォーン
『ジ・イクスプローシヴ・サイド』

第8位
WPCR-29121
ニーナ・シモン アット・ニューポート

第9位
WPCR-29118 国内初CD化
ジョニー・ハートマン
『アイ・ソート・アバウト・ユー』

第10位
WPCR-29101
バド・パウエル
『ザ・リターン・オブ・バド・パウエル』

全てのCDプレーヤーで再生可能な高音質CD
SHM-CD (Super High Material CD)とは…

通常のCDとは別種の液晶パネル用ポリカーボネート樹脂を使用することにより素材の透明性をアップ、マスター・クオリティに限りなく近づいた高音質CDです。

※この商品の高音質とはマスターに対する高忠実再生の意味で、音質に関する評価は再生環境等により異なりますのでご了承ください。
※SHMおよびSHM-CDロゴは、ユニバーサル ミュージック合同会社と株式会社JVCケンウッドの登録商標です。

JAZZ MASTERS COLLECTION 1200

名門アトランティック、ワーナー・ブラザーズ・レーベル等に、新たに加わったルーレット、ルースト、ジュビリー、コルピックス等の名盤、初CD化のレア盤をSHM-CD仕様、特別価格でリリースするシリーズの第5弾&6弾。

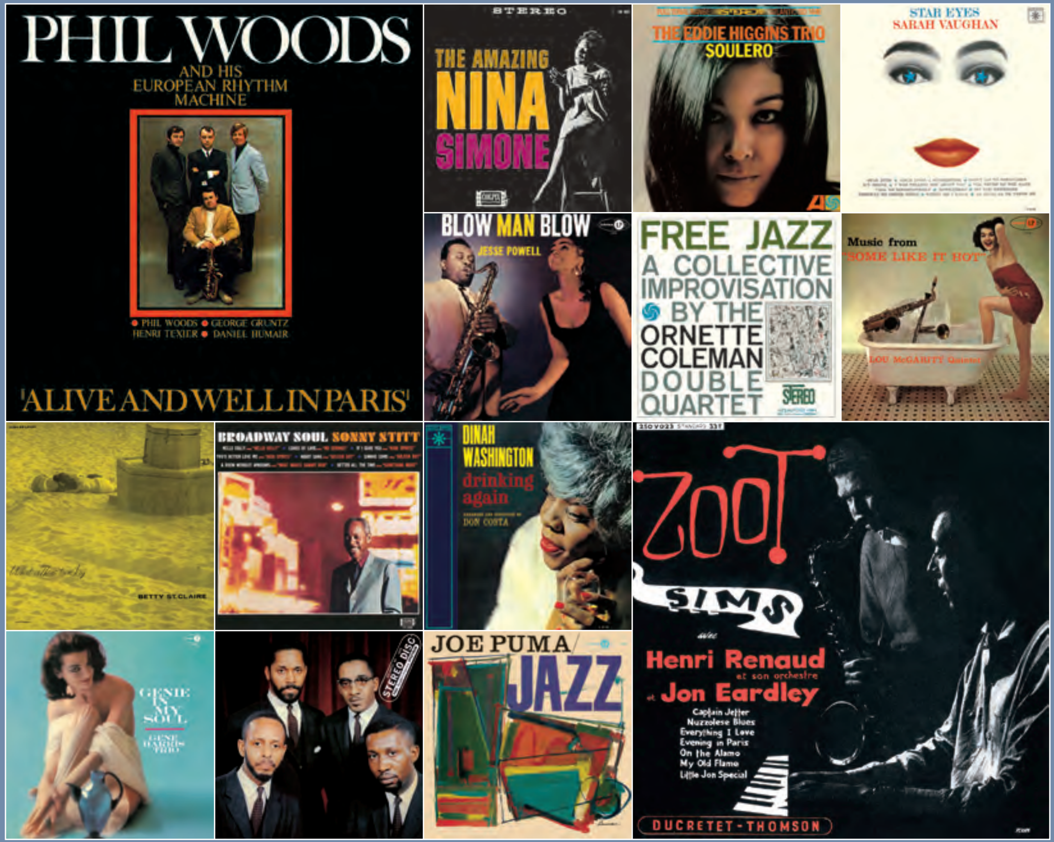
第5弾 全25タイトル:2017年1月25日発売

第6弾 全25タイトル:2017年2月22日発売

24bit デジタルリマスタリング
完全限定盤／SHM-CD仕様

特別価格 各¥1,200+税

ATLANTIC　Colpix　Jubilee　Parlophone　ROOST　ROULETTE



ジャズ・マスターズ・コレクション1200 特集サイト　http://wmg.jp/special/jazz1200/

WARNER MUSIC JAPAN

2017年1月25日発売

JAZZ MASTERS COLLECTION 1200

第5弾（全25タイトル）

ユーロ・ジャズの若き精鋭と新たなカルテットを結成したウッズの代表作。哀愁溢れる「若かりし日」は、今なお多くの人に感動を与える屈指の名演。

WPCR-29151　**[PARLOPHONE]**

□ フィル・ウッズ『アライヴ・アンド・ウェル・イン・パリス』

①若かりし日／②アライヴ・アンド・ウェル／③フリーダム・ジャズ・ダンス／④ストールン・モーメンツ／⑤ドキシー

フィル・ウッズ（as）、ジョルジュ・グルンツ（p）、アンリ・テキシェ（b）、ダニエル・ユメール（ds）

【録音】1968年11月14、15日　パリ

ヨーロッパへ渡ったフィル・ウッズによって68年に編成された"ヨーロピアン・リズム・マシーン"は、とびきりの鮮度と熱気をもつグループだった。まさに心機一転、即興プレイの限界に挑むようなフィルの吹奏とともに、4人のメンバーが渾然一体となって展開されてゆく白熱のプレイが素晴らしい。ロバート・ケネディの死を悼んでフィルが書いた〈若かりし日〉を筆頭に、圧倒的なプレイが繰りひろげられてゆく。

英国の名手ゴードン・ベックが参加したヨーロピアン・リズム・マシーンがドイツの名門ジャズ祭で繰り広げた伝説のライヴ名盤。

WPCR-29152　**[EMBRYO]**

□ フィル・ウッズ・アンド・ヒズ・ヨーロピアン・リズム・マシーン『フランクフルトのフィル・ウッズとヨーロピアン・リズム・マシーン』

①フリーダム・ジャズ・ダンス／②ジャン・ルイの歌／③ジョシュア／④ザ・ミーティング

フィル・ウッズ（as）、ゴードン・ベック（p）、アンリ・テキシエ（b）、ダニエル・ユメール（ds）

【録音】1970年3月21日
ドイツ「フランクフルト・ジャズ祭」でのライヴ

フィル・ウッズが、ヨーロッパの精鋭ミュージシャンを従えて編成した"ヨーロピアン・リズム・マシーン"。ここには70年3月、ドイツのフランクフルトで開かれたジャズ・フェスティヴァルにグループが出演したときの、白熱のステージの模様が収められている。〈フリーダム・ジャズ・ダンス〉〈ジャン・ルイの歌〉をはじめ、すべての演奏で自己を完全燃焼させてゆくフィル・ウッズの情熱的な即興プレイが圧巻である。

ビ・バップ・サックスの一匹狼、スティットが偉大なるパーカーのレパートリーに挑戦した意欲作。オリジナルLP収録の9曲に、2曲の未収録曲を追加。

WPCR-29153　**[ATLANTIC]**

□ ソニー・スティット『スティット・プレイズ・バード』

①オーニソロジー／②スクラップル・フロム・ジ・アップル／③マイ・リトル・スエード・シューズ／④パーカーズ・ムード／⑤オウ・プリヴァーヴ／⑥コ・コ／⑦コンファーメイション／⑧フーティ・ブルース／⑨コンステレーション／［オリジナルLP未収録曲］⑩ナウズ・ザ・タイム／⑪ヤードバード組曲

ソニー・スティット（as）、ジョン・ルイス（p）、ジム・ホール（g）、リチャード・デイヴィス（b）、コニー・ケイ（ds）

【録音】1963年1月29日　ニューヨーク

パーカー派のサックス奏者として知られるソニー・スティットが、パーカーの有名なオリジナルばかりをとりあげて演奏している。"パーカーに似ている"と言われることを嫌っていたスティットが、パーカーの死後8年を経て、あえてパーカーにアプローチをみせているのが、とても興味深い。それだけに、ふっ切れているソニー・スティット。そんな彼の心情を表すかのように、のびやかに奏でられるサックスの響きがとても美しい。

歴史的問題作「フリー・ジャズ」からわずか1ヵ月後に録音した、オーネットの創造性が存分に開花した名盤。ベースはビル・エヴァンス・トリオでの活躍で知られる天才ラファロが参加。

WPCR-29154　**[ATLANTIC]**

□ オーネット・コールマン『オーネット!』

①W.R.U.／②T. & T.／③C. & D.／④R.P.D.D.／［オリジナルLP未収録曲］⑤プルーフ・リーダーズ

ドン・チェリー（tp）、オーネット・コールマン（as）、スコット・ラファロ（b）、エド・ブラックウェル（ds）

【録音】1961年1月31日　ニューヨーク

1960年代以降のジャズに大きな影響をもたらしていったジャズ界の革命児、オーネット・コールマンが、歴史的問題作「フリー・ジャズ」からわずか1ヵ月後にカルテットで録音したセッション。当時ビル・エヴァンス・トリオでベースを弾いていたスコット・ラファロの参加も注目される。謎のようなイニシャル記号で表記されている4つのオリジナル・ナンバー。鋭い輝きをもつオーネット・グループのサウンドが、今日の耳にも眩しい。

クール・ジャズの創始者トリスターノ門下の筆頭格コニッツが、アトランティックに残した初期の代表作。ピアノレス・カルテットで冴える切れ味鋭いアルト・サックスをはじめ、テナー・サックスを吹いたトラックも収録した貴重盤。

WPCR-29155　**[ATLANTIC]**

□ リー・コニッツ『インサイド・ハイ・ファイ』

①ケアリーズ・トランス／②エヴリシング・ハプンズ・トゥ・ミー／③スウィート・アンド・ラヴリー／④コーク・ン・ピブ／⑤オール・オブ・ミー／⑥スター・アイズ／⑦ネスヒズ・インスタント／⑧インディアナ

リー・コニッツ（as, ts）、ビリー・バウアー（g）、アーノルド・フィシュキン（b）、ピーター・インド（b）、サル・モスカ（p）、ディック・スコット（ds）

【録音】1956年9月26日、10月16日　ニューヨーク

「コニッツ・ウィズ・ウォーン・マーシュ」と双璧をなす、リー・コニッツのアトランティック時代の名アルバムである。往時のトリスターノ門下生ばかりを従えて、のびやかにサックスで歌い上げるコニッツ。彼の代表曲といわれる〈ケアリーズ・トランス〉や有名なスタンダード・ナンバーを、あくまで知的に、そしてふくよかなトーンでプレイしている。コニッツが数曲でテナー・サックスを吹いているのも、注目に価しよう。

レニー・トリスターノ門下の筆頭格に位置する名テナー奏者ウォーン・マーシュが、マイルス・デイヴィスのリズム・セクションと共演したアトランティック時代の代表作。

WPCR-29156　**[ATLANTIC]**

□ ウォーン・マーシュ

①トゥー・クロース・フォー・コンフォート／②ヤードバード組曲／③私はご満足／④マイ・メランコリー・ベイビー／⑤もっと強く抱いて／⑥エクサープト

ウォーン・マーシュ（ts）、ロニー・ボール（p）、ポール・チェンバース（b）、フィリー・ジョー・ジョーンズ（ds）、ポール・モチアン（ds）

【録音】1957年12月12日、1958年1月16日　ニューヨーク

クール派のテナー奏者のなかでも、独特のメロディックな個性あふれるプレイを聴かせたウォーン・マーシュ。そんなマーシュの実力がフルに発揮されたワン・ホーン・アルバムである。全6曲中4曲が、ベースとドラムスだけを従えたトリオ演奏で、高潔なまでのマーシュの即興スピリットを、もっとも純粋な形で味わうことができる。ウォーン・マーシュならではの、ほのかな抒情に彩られたスタンダード解釈が、じつに素晴らしい。

『フェイヴァリッツ』と対をなすギター・トリオ大名盤。繊細なコード・ワークによるバラード、急速調のスタンダードで、ジャズ・ギターの醍醐味をじっくり堪能できる。

WPCR-29157　国内初CD化　**[ROOST]**

□ ジョニー・スミス『デザインド・フォー・ユー』

①フールズ・ラッシュ・イン／②クリフォードの思い出／③ザ・レディ・イズ・ア・トランプ／④ゼア・ウィル・ネヴァー・ビー・アナザー・ユー／⑤枯葉／⑥ムード・インディゴ／⑦センチメンタル・ジャーニー／⑧スリー・リトル・ワーズ／⑨マイ・ロマンス／⑩サムタイムズ・アイム・ハッピー／⑪アイル・テイク・ロマンス

ジョニー・スミス（g）、ジョージ・ルーマニ（b）、マウジー・アレキサンダー（ds）

【録音】1959年5月20日　ニューヨーク

ギブソンのジョニー・スミス・モデルをあしらったアルバム・カヴァーが印象的なスミスのトリオによるアルバム。同トリオとしては『フェイヴァリッツ』に続くもので、シンプルな編成だけにスミスのハーモニーの美しさは、いっそう際立っているように思える。演奏されているのは、おなじみのスタンダード・ナンバーばかり。誰にも親しまれている名曲のメロディーが、ひときわ優美な味わいとともに耳に届いてくる一枚になっている。

知られざる白人ギタリストが、ジャズ・ベースの巨匠や若きエヴァンスと組んだレア・アイテム。前半はヴァイブ入りトリオ、後半はカルテットと2種のモダンな演奏が楽しめる。

WPCR-29158　**[JUBILEE]**

□ ジョー・ピューマ〜ビル・エヴァンス『ジャズ』

①ユーバス／②ブルース・フォー・ミッジ／③ステイブルメイツ／④アイ・ガット・イット・バッド／⑤マザー・オブ・アール／⑥インディアン・サマー

ジョー・ピューマ（g）、エディ・コスタ（vib①-③）、ビル・エヴァンス（p④-⑥）、オスカー・ペティフォード（b）、ポール・モチアン（ds④-⑥）

【録音】1957年夏　ニューヨーク

ちょっぴりクールな抒情を漂わせる玄人好みのギタリスト、ジョー・ピューマのトリオとカルテットによる演奏が3曲ずつ収められている。カルテットのほうはピアニストのビル・エヴァンスの参加が魅力で、エヴァンスのハーモカルなタッチの響きが、ピューマのギターと美しい融合をみせてゆく。トリオのほうではエディ・コスタが参加。硬質なタッチをもつヴァイブの響きとともに、知的なセンスあふれる室内楽的サウンドが楽しめる。

スコット・ラファロ他界後、ベースにチャック・イスラエルを迎えた新エヴァンス・トリオが、ハービー・マンと共演した異色の作品。

WPCR-29159　**[ATLANTIC]**

□ ハービー・マン&ビル・エヴァンス・トリオ『ニルヴァーナ』

①ニルヴァーナ／②ジムノペディ／③アイ・ラヴ・ユー／④柳よ泣いておくれ／⑤ラヴァー・マン／⑥カシミア

ビル・エヴァンス（p）、ハービー・マン（fl）、チャック・イスラエル（b）、ポール・モチアン（ds）

【録音】1961年12月8日、1962年5月4日　ニューヨーク

ハービー・マンとビル・エヴァンスが共演している興味深い一作である。内向的な深さをもつエヴァンス・トリオに呼応するかのように、ハービー・マンも神秘的なプレイを展開。仏教で高い悟りの境地を意味するタイトル曲〈ニルヴァーナ〉をはじめ、インドにテーマを求めた〈カシミア〉、そしてエリック・サティの〈ジムノペディ〉など、いつものハービー・マンとはひと味違う、静謐な世界が探求された異色アルバムになっている。

ニューヨークの名門クラブ『ハーフ・ノート』で繰りひろげたインティメイトな雰囲気が魅力のライヴ名盤。

WPCR-29160　**[ATLANTIC]**

□ アート・ファーマー・カルテット『ライヴ・アット・ザ・ハーフ・ノート』

①サヴォイでストンプ／②スウィング・スプリング／③ホワッツ・ニュー／④アイ・ウォント・トゥ・ビー・ハッピー／⑤アイム・ゲッティン・センチメンタル・オーヴァー・ユー

アート・ファーマー（flh）、ジム・ホール（g）、スティーヴ・スワロウ（b）、ウォルター・パーキンス（ds）

【録音】1963年12月5〜7日　ニューヨーク「ハーフ・ノート」でのライヴ

抒情的なメロディストとしての魅力を存分に発揮していったアート・ファーマーとジム・ホール。そんな彼らがニューヨークの"ハーフ・ノート"で繰りひろげた、心温まるステージの模様をおさめている。演奏されるのは〈サヴォイでストンプ〉をはじめとするジャズの名曲ばかり。ファーマーのフリューゲル・ホーンを中心に、名門クラブがじつに良い雰囲気に包まれてゆくのが手にとるようにわかるライヴの秀作である。

ジャズ史上でもっとも重要なトロンボーンの巨人がルーレットに残した滋味溢れるスタジオ盤。サッチモに通じる人間味溢れる歌と演奏は、モダン以前のジャズを知らない世代にも必聴。

WPCR-29161　国内初CD化　歌詞付　**[ROULETTE]**

□ ジャック・ティーガーデン『ジャズ・マーヴェリック』

①エヴァー・ラヴィン・ベイビー／②アント・ヘイガーズ・カントリー・ホーム／③ハイ・ソサエティ／④ブルー・ドーン／⑤リヴァーボート・シャッフル／⑥ラウンドテーブル・ロンプ／⑦エイント・チャ・グラッド／⑧今から100年／⑨ティン・ルーフ・ブルース

ジャック・ティーガーデン（tb, vo①②⑦⑧）、ドン・ゴールディ（tp②）、ヘンリー・クエスタ（cl）、ドン・ユーエル（p）、スタン・パルス（b）、ロニー・グレッブ（ds）

【録音】②③④⑧⑨1960年1月2日　ニューヨーク／①⑤⑥⑦1960年1月25日　ニューヨーク

60年にルーレットに吹き込まれたジャック・ティーガーデンによる、ハッピーなスタジオ・セッションである。前年にバンドのメンバーになったばかりの若手トランペッター、ドン・ゴールディを従えたセクステットによる演奏で、のびやかなティーガーデンに比するように、ゴールディも味のあるプレイを展開。〈ハイ・ソサエティ〉〈ティン・ルーフ・ブルース〉など名曲とともに、ディキシーランド・ジャズの神髄が味わえる。

マクガリティはベニー・グッドマン、エディ・コンドンとの共演で知られるトラッド系のトロンボーン奏者。マリリン・モンロー主演映画の主題歌をはじめ、ほのぼのとした雰囲気のジャズ演奏が楽しめる。

WPCR-29162　**[JUBILEE]**

□ ルー・マクガリティ『サム・ライク・イット・ホット』

①サム・ライク・イット・ホット／②バイ・ザ・ビューティフル・シー／③星へのきざはし／④スイート・スー—ジャスト・ユー／⑤ダウン・アマング・ザ・シェルタリング・パームズ／⑥アイ・ワナ・ビー・ラヴド・バイ・ユー／⑦ラ・クンパルシータ／⑧アイム・スルー・ウィズ・ラヴ／⑨ランニン・ワイルド／⑩シュガー・ブルース／⑪スウィート・ジョージア・ブラウン／⑫サム・ライク・イット・ホット

ルー・マクガリティ（tb）、ディック・キャリー（p, tp）、ジョージ・バーンズ（g）、ジャック・レスバーグ（b）、ドン・マリノ（ds）

【録音】1959年12月　ニューヨーク

ベニー・グッドマン楽団でプレイしていたことでも知られるトロンボーン奏者のルー・マクガリティが、マリリン・モンロー主演の映画『お熱いのがお好き』の中のナンバーを楽しく演奏している。タンゴの名曲〈ラ・クンパルシータ〉をスウィング・アレンジで聴かせるセンスも秀逸。朗々としたトーンで、のびやかなプレイを繰りひろげるルー・マクガリティとともに、ジョージ・バーンズのスウィンギーなギター・プレイも光っている。

グレンは名曲「サルトリー・セレナーデ」の作者で、サッチモとの共演でも知られる名トロンボーン奏者。これは人気ピアニスト、フラナガンの参加で知られる1枚で、ファンの要望に応えて久々の再登場。

WPCR-29163　歌詞付　**[ROULETTE]**

□ タイリー・グレン『レッツ・ハヴ・ア・ボール』

①ラヴ・フォー・セール／②ギミ・ア・リトル・キッス、ウィル・ヤー・ハー?／③イエス・サー、ザッツ・マイ・ベイビー／④エンジェル・アイズ／⑤ライク・サムワン・イン・ラヴ／⑥星へのきざはし／⑦テイク・ユア・シューズ・オフ・ベイビー／⑧イエスタデイズ／⑨イフ・ウィンター・カムズ／⑩アイヴ・ガット・ザ・ワールド・オン・ア・ストリング／⑪サムタイムズ・アイム・ハッピー／⑫イフ・アイ・シュッド・ルーズ・ユー

タイリー・グレン（tb, vo③⑦⑩）、トミー・フラナガン（p）、メアリー・オズボーン（g）、トミー・ポッター（b）、ジョー・ジョーンズ（ds）

【録音】1958年　ニューヨーク

キャブ・キャロウェイ、デューク・エリントン、サッチモ・オールスターズなどの名バンドを渡り歩いたトロンボーン奏者のタイリー・グレンが、ルーレットに吹き込んだワン・ホーンによるリーダー作である。ワウワウ・ミュートを効果的に使いながら、人間味あふれる豊かな表情を描き出してゆくタイリー・グレン。そんな魅力的な個性とともに、あらためてトロンボーン・ジャズの楽しさを満喫することのできる一枚になっている。

豪華参加ミュージシャンによる、ミンガスが創造した名セッション。

WPCR-29164　**[ATLANTIC]**

□ チャールス・ミンガス『ブルース&ルーツ』

①水曜の夜の祈りの集い／②クライン・ブルース／③モーニン／④テンションズ／⑤マイ・ジェリー・ロール・ソウル／⑥EフラットとAHフラット・トゥー／［オリジナルLP未収録曲：オルタネイト・テイク］⑦水曜の夜の祈りの集い*／⑧テンションズ*／⑨マイ・ジェリー・ロール・ソウル*／⑩EフラットとAHフラット・トゥー*　　*MONO

チャールス・ミンガス（b）、ジミー・ネッパー（tb）、ウィリー・デニス（tb）、ジャッキー・マクリーン（as）、ジョン・ハンディ（as）、ブッカー・アーヴィン（ts）、ペッパー・アダムス（bs）、ホレス・パーラン（p）、マル・ウォルドロン（p）、ダニー・リッチモンド（ds）

【録音】1959年2月4日　ニューヨーク

「直立猿人」「道化師」などを発表して大きな話題をあつめていったチャールス・ミンガスが、彼のルーツであるブルースやゴスペルなどに、あらためてアプローチをおこなってみせている。ミンガス自身の主宰する"ジャズ・ワークショップ"からの選りすぐりメンバーによる9人編成の演奏。錚々たるプレイヤーたちの個性あふれるソロをフィーチュアしながら、自身の熱狂的な音楽カラーに染め上げてゆくミンガスが、ほんとうに凄い。

鬼才にしてビ・バップの高僧として知られるモンクが、ハード・バップの名門コンボに客演したアトランティックの貴重盤。オリジナルLP収録曲に別テイク3曲を追加。

WPCR-29165　**[ATLANTIC]**

□ アート・ブレイキーズ・ジャズ・メッセンジャーズ・ウィズ・セロニアス・モンク

①エヴィデンス／②イン・ウォーク・バド／③ブルー・モンク／④アイ・ミーン・ユー／⑤リズマニング／⑥パープル・シェイズ／［オリジナルLP未収録曲］⑦エヴィデンス*／⑧ブルー・モンク*／⑨アイ・ミーン・ユー*　　*オルタネイト・テイク

アート・ブレイキー（ds）、セロニアス・モンク（p）、ジョニー・グリフィン（ts）、ビル・ハードマン（tp）、スパンキー・デブレスト（b）

【録音】1957年5月14日、15日　ニューヨーク

アート・ブレイキー率いるジャズ・メッセンジャーズに、ピアノの巨人、セロニアス・モンクが客演している興味深い一作。ブレイキーとモンクの相性の良さもさることながら、やはりモンクの存在感は限りなく大きいものがあって、メッセンジャーズというよりも"アート・ブレイキー〜セロニアス・モンク・クインテット"という様相を呈したものになっているのが面白い。ジャズ・メッセンジャーズの全作品の中でも異色の傑作盤。

これぞソウル・ジャズの真剣勝負!
モントルー・ジャズ祭の名を世界に知らしめた“超”のつく大作。

WPCR-29166 **[ATLANTIC]**

□ レス・マッキャン&エディ・ハリス『スイス・ムーヴメント』

[1]コンペアード・トゥ・ホワット/[2]コールド・ダック・タイム/[3]キャサリンのテーマ/[4]ユー・ガット・イット・イン・ユア・ソウルネス/[5]ジェネレイション・ギャップ/[オリジナルLP未収録曲][6]カフタン

レス・マッキャン(p, vo)、エディ・ハリス(ts)、ベニー・ベイリー(tp)、リロイ・ヴィネガー(b)、ドナルド・ディーン(ds)

【録音】1969年6月21日　スイス「モントルー・ジャズ祭」でのライヴ

ソウルフルなテナー奏者エディ・ハリスとピアニスト、レス・マッキャンが初共演した69年“モントルー・ジャズ・フェスティヴァル”のステージ。ロバータ・フラックの名唱でも知られる〈コンペアード・トゥ・ホワット〉やリズミカルな〈コールド・ダック・タイム〉をはじめ、個性的なプレイヤーの出会いによって、フェスティヴァル会場が異様な熱気と興奮に包まれてゆくさまがよく捉えられた傑作ライヴ盤である。

コニー・ケイ参加から2年。ガレスピーのビッグ・バンド時代から演奏した得意演目で固めた初期の大傑作。ビ・バップ色の強いレパートリー中心の人気盤。

WPCR-29167 **[ATLANTIC]**

□ モダン・ジャズ・カルテット

[1]メドレー[ゼイ・セイ・イッツ・ワンダフル~愛は海よりも深く~ほのかな望み~マイ・オールド・フレーム~身も心も]/[2]絶体絶命/[3]ラ・ロンド/[4]チュニジアの夜/[5]イエスタデイズ/[6]バグス・グルーヴ/[7]バーデン・バーデン

ジョン・ルイス(p)、ミルト・ジャクソン(vib)、パーシー・ヒース(b)、コニー・ケイ(ds)

【録音】1957年4月5日　ニューヨーク

シンプルにグループ名をとって「モダン・ジャズ・カルテット」と名付けられている本アルバムには、MJQの音楽的な魅力がもっともピュアな形で表れている。スタンダード・ナンバー5曲を繋いだ珠玉の〈メドレー〉。スリリングな〈チュニジアの夜〉。そしてミルトのブルージーなプレイがいつまでも心にのこる〈イエスタデイズ〉。ジャズ・ナンバーもあくまで典雅な響きで聴かせるMJQの神髄が示された名演ばかりである。

“ソウル・マン”ミルト・ジャクソンが奏でる「バラッズ&ブルース」の極み。はつらつたるデビューのアトランティック第一弾。

WPCR-29168 **[ATLANTIC]**

□ ミルト・ジャクソン『バラッズ&ブルース』

[1]ソー・イン・ラヴ/[2]ジーズ・フーリッシュ・シングス/[3]ソリチュード/[4]ソング・イズ・エンデッド/[5]ゼイ・ディドント・ビリーヴ・ミー/[6]ハウ・ハイ・ザ・ムーン/[7]ジェリーズ・ブルース/[8]ハロー/[9]ブライト・ブルース

ミルト・ジャクソン(vib)、ラッキー・トンプソン(ts)、ジョン・ルイス(p)、バーニー・ケッセル(g)、バリー・ガルブレイス(g)、スキーター・ベスト(g)、オスカー・ペティフォード(b)、パーシー・ヒース(b)、ケニー・クラーク(ds)、ローレンス・マラブル(ds)他

【録音】1956年1月17日、21日、2月14日　ニューヨーク

ブルージーなプレイを本領とする“ヴァイブの魔術師”ミルト・ジャクソンのバラード演奏の素晴らしさは、定評あるところである。そんなミルトがタイトルどおり“バラード”と“ブルース”に焦点を当てたプレイを聴かせるという、まさにミルトの真髄に迫った一作。くつろいだ雰囲気の中で、他のメンバーたちもそれぞれに実力を発揮。ミルト・ジャクソンの音楽的特質が、最良の形で描き出された好企画アルバムになっている。

「スリー・サウンズ」でおなじみの人気ピアニストとは同名異人によるジュビリーにおけるセカンド・アルバム。ベースの名手ベン・タッカーを迎えて、小気味よいトリオ演奏を聴かせてくれる。

WPCR-29169 国内初CD化 **[JUBILEE]**

□ ジーン・ハリス『ジニー・イン・マイ・ソウル』

[1]ゼアズ・ア・ジニー・イン・マイ・ソウル/[2]クール・ミックス/[3]ウォーキング・シューズ/[4]アイ・ウォナ・ゴー・ホエア・ユー・アー/[5]ザッツ・ウーナ/[6]ラヴ・フォー・セール/[7]マンゴズ/[8]夢から醒めて/[9]ザ・スリル・イズ・ゴーン/[10]チューン・アップ

ジーン・ハリス(p)、ベン・タッカー(b)、ケニー・ハリス(ds)

【録音】1959年　ニューヨーク(推定)

白人ピアニストのジーン・ハリスがジュビリー・レーベルに吹き込んだ、とても珍しいピアノ・トリオ・アルバム。ベーシストに名手ベン・タッカーが加わっていて、スマートな中にもグルーヴィな雰囲気をよく感じることができる。タイトル曲はファンキーな哀感あふれる魅力的なナンバー。ほかにもクラシック風のテクニックをまじえて聴かせるバラード〈ザッツ・ウーナ〉など、優雅なハリスのタッチを楽しめる作品になっている。

ラテン・シーンの名パーカッション奏者がルーレットに残した注目盤。ジョビンの名曲をはじめ、フレディ・ハバード、トム・マッキントッシュらのモダン・ジャズ名曲もカヴァー。クラーク・テリー、ジョー・ファレルの参加も貴重。

WPCR-29170 **[ROULETTE]**

□ ウィリー・ボボ『ボボズ・ビート』

[1]ボン・スエノ/[2]ネイキッド・シティ・テーマ/[3]フェリシダージ/[4]ボサ・ノヴァ・イン・ブルー/[5]ボロキーニョ/[6]クライシス/[7]ミ・ファス・イ・レコーダー/[8]ケイパーズ/[9]レット・ユア・ヘア・ダウン・ブルース

ウィリー・ボボ(timb, perc)、クラーク・テリー(tp)、ジョー・ファレル(ts)、フランク・アンダーソン(p, org)他 不明

【録音】1962年10月11日　ニューヨーク

ラテン・ジャズを代表するパーカッション奏者として大活躍したウィリー・ボボが、60年代の初めにルーレットへ吹き込んだ傑作アルバム。アフロ・キューバンをベースに、ジャズやブラジリアン・ビートも自在にまじえて、豊かな色彩感をもつリズミックなサウンドが繰りひろげられてゆく。ジャズ・メッセンジャーズの演奏で知られる〈クライシス〉が演じられているのも聴きもの。ボボ・マジックの出発点にもなった一枚である。

たった数枚のアルバムを残して、消息不明となった幻の実力派シンガー。ジュビリーに残した2枚の10インチ盤をカップリングした12インチ盤が、バート・ゴールドブラットの人気カヴァー仕様で初復刻。

WPCR-29171 国内初CD化 歌詞付 **[JUBILEE]**

□ ベティ・セント・クレア『ホワット・イズ・ゼア・トゥ・セイ』

[1]ザット・オールド・ブラック・マジック/[2]ホワット・イズ・ゼア・トゥ・セイ/[3]イースト・オブ・ザ・サン/[4]プレリュード・トゥ・ア・キス/[5]アウト・オブ・ノーホエア/[6]アイ・ハドント・エニワン・ティル・ユー/[7]オールモスト・ライク・ビーイング・イン・ラヴ/[8]ヒア・カムズ・トラブル・アゲイン/[9]マイ・ワン・アンド・オンリー・ラヴ/[10]ホワイ・トライ・トゥ・チェンジ・ミー・ナウ/[11]スカイラーク/[12]ギヴ・ミー・ザ・シンプル・ライフ

ベティ・セント・クレア(vo)、ハル・マクシック(as[2][5][7][8], cl[5])、ジミー・レイニー(g[2][5][7][8])、バリー・ガルブレイス(g[1][3][4][6][9][10][11][12])他

【録音】[1][3][4][6][9][10][11][12]1955年　ニューヨーク、[2][5][7][8]1955年1月　ニューヨーク

ブルージーな個性をもった実力派のシンガー、ベティ・セント・クレア。そんな彼女の魅力的な個性に触れることのできる一枚である。ジュビリーの10インチ盤としてリリースされたものをカップリングして12インチアルバム化したもので、「Hal Mckusick Plays Betty St. Claire Sings」からの4曲と、「Cool And Clearer」の8曲すべてが収められている。レコーディングの少なかった彼女だけに、とくにヴォーカル・マニアには貴重な一作になっている。

50年代、実力派歌手への飛躍を期待されたデラ・リースが、レグ・オーウェン指揮のオーケストラで歌った、ジュビリーにおける通算4枚目のアルバム。

WPCR-29172 国内初CD化 歌詞付 **[JUBILEE]**

□ デラ・リース『ホワット・ドゥ・ユー・ノウ・アバウト・ラヴ』

[1]ホワット・ドゥ・ユー・ノウ・アバウト・ラヴ/[2]恋に落ちた時/[3]昨日見た夢/[4]アイ・ガット・イット・バッド/[5]アイル・ネヴァー・ビー・ザ・セイム/[6]ユー・ベター・ゴー・ナウ/[7]アイム・ノーバディズ・ベイビー/[8]アイ・ネヴァー・ニュー/[9]アイ・ソート・オブ・ユー・ラスト・ナイト/[10]ユー・ドント・ノウ・ホワット・ラヴ・イズ/[11]アイム・スルー・ウィズ・ラヴ/[12]ザッツ・オール・ゼア・イズ

デラ・リース(vo)、レグ・オーウェン(cond)、オーケストラ

【録音】1958年末　ニューヨーク(推定)

ブルースやゴスペルをルーツにもちながらも、ジャズとポップスの領域にまたがって素晴らしい歌唱を聴かせてくれるデラ・リース。そんな彼女によってジュビリーに吹き込まれた、初期の代表作の一枚である。タイトル曲〈ホワット・ドゥ・ユー・ノウ・アバウト・ラヴ〉をはじめとする、やるせない恋のバラードやスタンダード・ナンバーを歌い綴っており、彼女の歌声をストリングスのオーケストラが美しく包み込んでゆく。

ルーレット第3弾は、ドン・コスタの編曲によるストリングス・オーケストラとの共演。「ブルースの女王」ダイナの魅力を再発見できる名唱がズラリと並ぶ。

WPCR-29173 国内初CD化 歌詞付 **[ROULETTE]**

□ ダイナ・ワシントン『ドリンキング・アゲイン』

[1]ドリンキング・アゲイン/[2]ジャスト・フレンズ/[3]アイム・ゴナ・ラフ・ユー・アウト・オブ・マイ・ライフ/[4]アイル・ビー・アラウンド/[5]ラヴ、アイ・ファウンド・ユー・ゴーン/[6]アイ・ドント・ノウ・ユー・エニモア/[7]家に帰らないか/[8]ラヴァー・マン/[9]ザ・マン・ザット・ガット・アウェイ/[10]フォー・オール・ウィ・ノウ/[11]セイ・イット・イズント・ソー/[12]オン・ザ・ストリート・オブ・リグレット

ダイナ・ワシントン(vo)、フレッド・ノーマン(arr[1])、ドン・コスタ(arr[2]~[12])他

【録音】1962年3月18日([1])、5月8日([2][3][4][8][10][11])、5月9日([5][6][7][9][12])　ニューヨーク

“ブルースの女王”と呼ばれたダイナ・ワシントンの歌声は並々ならぬ説得力をもっており、その個性はストリングスをバックにした本アルバムにも遺憾なく発揮されている。しみじみと語りかけるように歌われるタイトル曲の〈ドリンキング・アゲイン〉を筆頭に、ダイナが歌う名スタンダード・ナンバーの数々。スケールの大きなダイナ・ワシントンの歌唱を名アレンジャー、ドン・コスタのオーケストラが、美しく包み込んでゆく。

驚くべき才能。魂を振り絞るような個性的な歌声で印象づけた不世出の天才の、コルピックスにおけるファースト・アルバム。

WPCR-29174 歌詞付 **[COLPIX]**

□ ニーナ・シモン『ジ・アメイジング・ニーナ・シモン』

[1]ブルー・プレリュード/[2]チルドレン・ゴー・ホエア・アイ・センド・ユー/[3]トゥモロー/[4]サヴォイでストンプ/[5]春の如く/[6]ユーヴ・ビーン・ゴーン・トゥー・ロング/[7]ザッツ・ヒム・オーヴァー・ゼア/[8]チリー・ウィンズ・ドント・ブロー/[9]ミドル・オブ・ザ・ナイト・テーマ/[10]キャント・ゲット・アウト・オブ・ジス・ムード/[11]ウィロー・ウィープ・フォー・ミー/[12]ソリテア

ニーナ・シモン(vo, p)、ラージ・オーケストラ、ボブ・マーシー(dir) 詳細不明

【録音】1959年　ニューヨーク

コルピックスと契約を結んだニーナ・シモンの、同レーベルでの初のレコーディング・セッション。ジャズ・スタンダード曲だけでなく、トラディショナルなフォークや知られざる珠玉の作品を選んで、力強く、ときにはしみじみとした表現で聴かせてくれる。〈ブルー・プレリュード〉のやるせないムード。哀しみに彩られながらも確かな表情で語りかけてくる〈トゥモロー〉をはじめ、ニーナの強烈な個性に塗りたくられた歌唱ばかりである。

トニー・ベネットのヒットを手掛けた編曲家マーティ・マニングの指揮によるオーケストラとの共演盤。豪華ストリングス入りの伴奏で新旧のラヴ・バラードを情感豊かに歌いあげている。

WPCR-29175 国内初CD化 歌詞付 **[ROULETTE]**

□ サラ・ヴォーン『スター・アイズ』

[1]スター・アイズ/[2]ワンス・アポン・ア・サマータイム/[3]ドント・ゴー・トゥ・ストレンジャーズ/[4]アイシー・ストーン/[5]アイ・ワズ・テリング・ヒム・アバウト・ユー/[6]アイル・ネヴァー・ビー・ザ・セイム/[7]コール・ミー・イレスポンシブル/[8]ビワイルダード/[9]ドゥ・ユー・リメンバー/[10]ゼアル・ビー・アザー・タイムズ/[11]ウィズイン・ミー・アイ・ノウ/[12]アズ・ロング・アズ・ヒー・ニーズ・ミー

サラ・ヴォーン(vo)、マーティ・マニング(arr, cond)、オーケストラ

【録音】1963年2月13日([3][7][10])、2月27日([1][5][6][9])、3月5日([2][4][8][11][12])　ニューヨーク

「ロンリー・アワーズ」とほぼ同時期に吹き込まれた、もう一枚のサラ・ヴォーンのバラード・アルバム。たっぷりした表情で歌われる〈スター・アイズ〉。そして近年、マイケル・ブーブレのアルバム・タイトルにもなった〈コール・ミー・イレスポンシブル〉での抑揚をもった節まわしの素晴らしさ！　年齢的には40代にさしかかろうという、まさに円熟期のサラ・ヴォーンによって吹き込まれた、ルーレット名盤の一枚である。

2017年2月22日発売

JAZZ MASTERS COLLECTION 1200

第6弾(全25タイトル)

ジェリー・マリガン・グループの一員としてパリを訪問した人気テナー奏者のズートが、現地のモダン派ミュージシャンと繰り広げた珠玉の名演。かつてはマニア垂涎の希少盤としても有名だった1枚。

WPCR-29176 **[PARLOPHONE]**

□ ズート・シムズ『オン・デュクレテ・トムソン』

[1]キャプテン・ジェッター/[2]ニューゾリーズ・ブルース/[3]エヴリシング・アイ・ラヴ/[4]パリの午後/[5]オン・ジ・アラモ/[6]マイ・オールド・フレイム/[7]リトル・ジョン・スペシャル

ズート・シムズ(ts)、ジョン・アードレイ(tp)、アンリ・ルノー(p)、ブノアア・ケルサン(b)、シャルル・ソードレ(ds)

【録音】1956年3月16日　パリ

生涯をつうじての絶頂期を迎えていた50年代半ばのズート・シムズ。そんなズートによってフランスのデュクレテ・トムソンに吹き込まれた最高傑作の一枚である。心地よいドライヴをもった〈キャプテン・ジェッター〉。たっぷりした情感の込められた〈パリの午後〉では、ズートによるバラード・プレイの神髄を耳にすることができる。他のトラックも、豊かなイマジネイションの魅力が最高に発揮されている演奏ばかりである。

ビ・バップ直系のサックス奏者が、サド・ジョーンズ、ズート・シムズを含む豪華アンサンブルをバックに、人気ミュージカルのヒット曲を取り上げた60年代の代表作。ポップな題材と流麗なソロとの対比が秀逸な1枚。

WPCR-29177 **[COLPIX]**

□ ソニー・スティット『ブロードウェイ・ソウル』

[1]ハロー・ドーリー/[2]ベター・オール・ザ・タイム/[3]ユード・ベター・ラヴ・ミー/[4]ナイト・ソング/[5]ア・ルーム・ウィズアウト・ウィンドウズ/[6]ギム・サム/[7]ローズ・オブ・ラヴ/[8]イフ・アイ・ゲイヴ・ユー

ソニー・スティット(as, ts)、サド・ジョーンズ、アーニー・ロイヤル(tp)、ジミー・クリーヴランド(tb)、フィル・ウッズ(as)、ズート・シムズ、バド・ジョンソン、ジェローム・リチャードソン(ts)、ロジャー・ケラウェイ(p)、ウォルター・ビショップJr.(p)、ミルト・ヒントン(b)、オシー・ジョンソン(ds)

【録音】1965年2月13日　ニューヨーク

ソニー・スティットがブロードウェイ・ミュージカルのナンバーだけをとりあげて演奏している60年代半ばの作品。〈ハロー・ドーリー〉以外にポピュラーなナンバーは含まれてないものの、「ハイ・スピリッツ」「ゴールデン・ボーイ」など、この時代の新作ミュージカルからの曲ばかりがとりあげられているのに注目。豪華メンバーによるアンサンブルをバックに、スティットは終始マイ・ペースで、ハッピーなプレイを聴かせている。

前衛ジャズの巨匠2人が率いる2種類のカルテットで集団即興演奏を繰り広げたモダン・ジャズの歴史的名盤。

WPCR-29178 **[ATLANTIC]**

□ オーネット・コールマン『フリー・ジャズ』

[1]フリー・ジャズ
[オリジナルLP未収録曲]
[2]ファースト・テイク

オーネット・コールマン(as)、エリック・ドルフィー(b-cl)、ドン・チェリー(pocket-tp)、フレディ・ハバード(tp)、スコット・ラファロ(b)、チャーリー・ヘイデン(b)、ビリー・ヒギンズ(ds)、エド・ブラックウェル(ds)

【録音】1960年12月21日　ニューヨーク

オーネット・コールマンを中心に繰りひろげられる凄まじい集団即興演奏。通常のジャズ・コンボを左右のチャンネルに配した“ダブル・カルテット”という異色の編成もさることながら、混沌のきわみとも思える音楽がまばゆいばかりのアブストラクトな光を放っていることに、あらためて感嘆させられる。限りなく自由奔放なプレイの中にオーネットならではの強力な美意識が秘められた、ジャズ史上稀にみる問題作。

素朴な田園から喧噪の都会まで、アメリカ全土を旅するテーマで作られた才人ジュフリーの意欲作。わずか3つの楽器で表現されるジャズの面白さ・奥深さをじっくり堪能できる名演。

WPCR-29179 **[ATLANTIC]**

□ ジミー・ジュフリー『トラヴェリン・ライト』

[1]トラヴェリン・ライト/[2]ザ・スワンプ・ピープル/[3]ザ・グリーン・カントリー(ニュー・イングランド・ムード)/[4]42丁目/[5]ピッキン・エム・アップ・アンド・レイン・エム・ダウン/[6]ザ・ロンリー・タイム/[7]ショウ・ミー・ザ・ウェイ・トゥ・ゴー・ホーム/[8]カリフォルニア・ヒア・アイ・カム

ジミー・ジュフリー(cl, ts, bs)、ボブ・ブルックマイヤー(v-tb)、ジム・ホール(g)

【録音】1958年1月20日、21日、23日　ニューヨーク

クラリネット、バルブ・トロンボーン、ギターというユニークな楽器編成の“ジミー・ジュフリー3”。シンプルな編成だけあって、メンバー間のインタープレイやさりげないアレンジの妙が際立って耳に届いてくる。ビリー・ホリデイの歌でも知られる〈トラヴェリン・ライト〉と共に、素朴なアメリカン・フォークの香りを放つジュフリーのオリジナルの数々。彼らの高度な音楽性がふんだんに盛り込まれている意欲作である。

40年代の後半、ベイシー楽団でも活躍したテキサス・テナーの実力派が、50年代末にジュビリーに残した希少盤。ブルースやリズム&ブルースに根ざした、ムード満点のサックス・ソロが堪能できる。

WPCR-29180 **[JUBILEE]**

□ ジェシー・パウエル『ブロウ・マン・ブロウ』

[1]ジェシーズ・テーマ/[2]ブルー・アンド・センチメンタル/[3]クロス・オン・ザ・グリーン/[4]アイ・カヴァー・ザ・ウォーターフロント/[5]アイヴ・ガット・ユー・アンダー・マイ・スキン/[6]ラヴ・イズ・ヒア・トゥ・ステイ/[7]ジス・イズ・オールウェイズ/[8]マイ・サイレント・ラヴ/[9]ク・パソ/[10]ノー・トゥモロウ/[11]バット・ビューティフル/[12]ジャスト・チップス

エディ・ウィリアムス(tp)、ヘンダーソン・チェンバース(tb)、ジェシー・パウエル(ts)、ノーマン・ソーントン(bs)、オスカー・デナード(p)、ペック・モリソン(b)、ウィルバート・ホーガン(ds)

【録音】1959年　ニューヨーク

テキサス出身の強烈な個性をもつテナー奏者のジェシー・パウエル。40年代からジャズとR&Bを股にかけてプレイをおこなっていたパウエルが、ジュビリーに吹き込んだ貴重な一枚である。アップ・テンポのナンバーでR&B色の濃いノリの良いブロウを聴かせるいっぽうで、〈ブルー・アンド・センタチメンタル〉〈バット・ビューティフル〉などのバラードでは、ゆたかな情感をいっぱいに振りまいていて、そのコントラストが楽しい一枚になっている。

久しぶりに古巣アトランティックに戻ったミンガスが、1975年、往年の名盤『直立猿人』を彷彿とさせる2管編成コンボを率いて2枚同時発表した快作。

WPCR-29181 **[ATLANTIC]**

□ チャールス・ミンガス『チェンジズ・ワン』

[1]アッティカ刑務所事件のロックフェラーを忘れるな／[2]スー・グラハムの変化／[3]デヴィル・ブルース／[4]敬愛するエリントン・サウンド

チャールス・ミンガス(b)、ジャック・ウォルラス(tp)、ジョージ・アダムス(ts, vo[3])、ドン・ピューレン(p)、ダニー・リッチモンド(ds)

【録音】1974年12月27日、28日、30日
ニューヨーク、アトランテック・レコーディング・スタジオ

"このアルバムと「チェンジズ・トゥー」は、僕がこれまでに作ったベスト・アルバムだ…"とミンガス自身が言っている。ジャック・ウォルラス、ジョージ・アダムスというアクの強さをもつホーン陣に、伝統からフリーまでを行き来する異才ドン・ピューレンを加えて展開される、ワン&オンリーなミンガス・ミュージック。エリントンへの強い敬愛の気持ちが表れた〈敬愛するエリントン・サウンド〉をはじめ、強烈なミンガスの体臭に塗りたくられた演奏が並んでいる。

『カーネギー・ホール』でのライヴで完全復活を高らかに宣言した巨人ミンガスが、当時の新人(アダムス&ピューレン)を含むコンボ編成で2枚同時に発表した1975年の快作。

WPCR-29182 **[ATLANTIC]**

□ チャールス・ミンガス『チェンジズ・トゥー』

[1]F監房はアメリカ版ナチ収容所／[2]オレンジ・ワズ・ザ・カラー・オブ・ハー・ドレス、ゼン・シルク・ブルー／[3]ブラック・バッツ・アンド・ポールズ／[4]敬愛するエリントン・サウンド／[5]フォー・ハリー・カーネイ

チャールス・ミンガス(b)、ジョージ・アダムス(ts)、ジャック・ウォルラス(tp)、マーカス・ベルグレイヴ(tp[4])、ドン・ピューレン(p)、ダニー・リッチモンド(ds)、サイ・ジョンソン(arr[4])、ジャッキー・パリス(voD)

【録音】1974年12月27日、28日、30日
ニューヨーク、アトランテック・レコーディング・スタジオ

「チェンジズ・ワン」と同じ時に録音されたもので、もちろん内容も同レベルにある。新作〈F監房は…〉などの他に、17分を超える〈オレンジ・ワズ・ザ・カラー…〉のコンボ・ヴァージョンを収録。ウォルラスのトランペットが炸裂し、アダムスのテナーが咆哮、そして変幻自在のピューレン。それらをひとつにまとめ上げてゆく大黒柱ミンガスの強烈なリーダーシップぶり。ミンガスの音楽のもつ巨大なスケールに圧倒されるアルバムである。

スミスが率いたオリジナル・カルテットのメンバー4人が、久しぶりに再会して繰り広げた好セッション。お互いの音楽性を理解した盟友だけに、どの演奏も抜群の完成度と一体感を誇る。

WPCR-29183 国内初CD化 **[ROOST]**

□ ジョニー・スミス『プラス・ザ・トリオ』

[1]アイ・ガット・イット・バッド／[2]レッツ・フォール・イン・ラヴ／[3]言い出しかねて／[4]サム・オブ・ジーズ・デイズ／[5]ユー・トゥック・アドヴァンテージ・オブ・ミー／[6]虹の彼方に／[7]アウト・オブ・ノーホエア／[8]プレリュード・トゥ・ア・キス／[9]ウン・ポコ・ロコ／[10]ヒッポ・ザ・センチメンタル・ヒッピー／[11]イッツ・ユー・オア・ノー・ワン

ジョニー・スミス(g)、ボブ・パンコースト(p)、ジョージ・ルーマニ(b)、マウジー・アレキサンダー(ds)

【録音】1960年初頭 ニューヨーク

ジョニー・スミスのギターにピアノ・トリオを加えたカルテットによる60年のアルバム。独特のソフトな味わい深いギター・ハーモニーの魅力はもちろんのこと、マイナー・キーの〈サム・オブ・ジーズ・デイズ〉などでは、スウィンギーな魅力をいっぱいに振りまいてみせる。さらにバド・パウエル作〈ウン・ポコ・ロコ〉もとりあげてエキサイティングな一面もみせるなど、バラエティあふれるサウンドが楽しめる作品になっている。

同じジーン・ハリスでもスリー・サウンズの黒人ピアニストとは同姓同名の別人。こちらは技巧派の白人で、趣味の良いスウィング感溢れるトリオ演奏が楽しめる。

WPCR-29184 **[JUBILEE]**

□ ジーン・ハリス『アワ・ラヴ・イズ・ヒア・トゥ・ステイ』

[1]レッツ・フォール・イン・ラヴ／[2]アイド・ドゥ・エニシング・フォー・ユー／[3]チアフル・リトル・イアフル／[4]ア・フォギー・デイ／[5]マイ・ハート・ビロングス・トゥ・ダディ／[6]ゼアル・ネヴァー・ビー・アナザー・ユー／[7]ザ・ガール・フレンド／[8]ラヴ・ミー・オア・リーヴ・ミー／[9]オールド・デヴィル・ムーン／[10]ヴァーシティ・ドラッグ／[11]アワ・ラヴ・イズ・ヒア・トゥ・ステイ／[12]オールモスト・ライク・ビーイング・イン・ラヴ／[13]トライ・ア・リトル・テンダネス／[14]アウト・オブ・ジス・ワールド

ジーン・ハリス(p)、マイク・ロング(b)、ジョージ・ハーマン(ds)

【録音】1955年 ニューヨーク

"ザ・スリー・サウンズ"のリーダーとは同名異人の白人ピアニスト、ジーン・ハリスがジュビリーに吹き込んだ珍しい一枚。ジュリアードやニューヨークのミュージック・カレッジに学び、クラシックの素養をもっているハリスは、スタンダード・ナンバーを中心に小粋でスウィンギーなプレイに終始する。ピアノ・トリオの楽しさを気軽に味わうことのできる一枚で、バート・ゴールドブラットによるジャケット・カヴァーも、とても印象的である。

一連の日本制作で人気を獲得したヒギンズが、60年代半ば、アトランティックに残したソウルフルなピアノ・トリオ名盤。フォスターの名曲「ビューティフル・ドリーマー」のポップなアレンジも秀逸。

WPCR-29185 **[ATLANTIC]**

□ エディ・ヒギンズ・トリオ『ソウレロ』

[1]タンゴ・アフリケイン／[2]ラヴ・レターズ／[3]シェリーズ・ワールド／[4]ソウレロ／[5]ミスター・エヴァンス／[6]ジャンゴ／[7]ビューティフル・ドリーマー／[8]メイキン・フーピー

エディ・ヒギンズ(p)、リチャード・エヴァンス(b)、マーシャル・トンプソン(ds)

【録音】1965年8月25日 シカゴ

優雅なタッチを聴かせて、わが国でも絶大な人気を誇っているピアニストのエディ・ヒギンズが、まだ若かった頃にアトランティックへ吹き込んだ貴重なリーダー作。シカゴの有名なクラブ"ロンドン・ハウス"のハウス・ピアニストをつとめていた頃の録音で、生粋のシカゴアンであるリチャード・エヴァンス、マーシャル・トンプソンがサポート。ヒギンズのメロディックな美質がよく表れたトリオ・アルバムになっている。

クラシックの素養も感じさせる人気ピアニスト、ローランド・ハナの記念すべき初リーダー作。同郷の親友ケニー・バレルも参加。

WPCR-29186 **[ATLANTIC]**

□ ローランド・ハナ『デストリー・ライズ・アゲイン』

[1]アイ・ノウ・ユア・カインド／[2]フェア・ワーニング／[3]ローズ・ラヴジョイ・オブ・パラダイス・アレイ／[4]ザット・リング・オン・ザ・フィンガー／[5]ワンス・ニュー・ア・フェラ／[6]エニワン・ウッド・ラヴ・ユー／[7]アイ・セイ・ハロー／[8]フープ・デ・ジングル

ローランド・ハナ(p)、ケニー・バレル(g)、ジョージ・デュヴィヴィエ(b)、ロイ・バーンズ(ds)

【録音】1959年4月16日、17日 ニューヨーク

ハロルド・ロームが音楽を担当した「デストリー・ライズ・アゲイン」は、マレーネ・ディートリッヒ、ジェームス・スチュワートが主演した39年のミュージカル映画。このアルバムでは、人気ピアニストのローランド・ハナが、映画の中のナンバーばかりを演奏している。ミュージカルのジャズ化としても興味を惹かずにはおかないこの作品。それ以上に純粋なピアノ・アルバムとしても、ハナの魅力的なタッチに魅せられる1枚である。

西海岸の人気ピアニスト、ジャック・ウィルソンのアトランティック・デビュー作。MJQと同じカルテット編成で、ロイ・エアーズがミルト・ジャクソン直系のブルージーなプレイを繰り広げる。

WPCR-29187 **[ATLANTIC]**

□ ジャック・ウィルソン『ジャック・ウィルソン・カルテット feat. ロイ・エアーズ』

[1]コルコヴァード／[2]ジャックレグ／[3]ブルース・ウィ・ユース／[4]ハーバー・フリーウェイ／[5]デ・クリティフュー／[6]ニルヴァーナ&ダナ

ジャック・ウィルソン(p)、ロイ・エアーズ(vib)、アル・マッキボン(b)、ニック・マルティニス(ds)

【録音】1963年2月6日 ニューヨーク

西海岸を中心に活動をおこなって、洗練されたメロディックなピアノ・タッチを聴かせたジャック・ウィルソンの、記念すべき初リーダー・アルバム。まだデビュー間もなかったヴァイブ奏者、ロイ・エアーズとのカルテットによる演奏で、モダンなハーモニー感覚をもつふたりのプレイが、とびきりフレッシュ！ ボサ・ノヴァの名曲〈コルコヴァード〉やウィルソンのオリジナルの数々に、60年代ジャズの新しさが凝縮されている。

ジャズ界に不滅の業績を残した鬼才が、あらゆる可能性の探求に全力を傾注したソロ・ピアノの秀作。

WPCR-29188 **[ATLANTIC]**

□ レニー・トリスターノ『ニュー・トリスターノ』

[1]ビカミング／[2]Cマイナー・コンプレックス／[3]ユー・ドント・ノウ・ホワット・ラヴ・イズ／[4]デリバレイション／[5]シーン・アンド・ヴァリエイションズ[a)キャロル～b)タニア～c)バド]／[6]ラヴ・ラインズ／[7]Gマイナー・コンプレックス

レニー・トリスターノ(p)

【録音】1960～1962年 ニューヨーク

クール・ジャズの時代に、ひとつの流派を編み出したレニー・トリスターノ。そんなトリスターノが、彼のコンセプトを完結した形で表現すべくピアノに向かった作品である。彼は静かに燃える炎のように情熱を内に秘めて、淡々と長いメロディー・ラインを弾きあげており、どのトラックにも彼ならではの研ぎ澄まされた抒情美が溢れている。まさにワン・アンド・オンリー、これぞ100% ピュアなトリスターノの世界である。

ジャズ・ヴァイブの最高峰ミルト・ジャクソンが残した初期の代表作。クインシー・ジョーンズの編曲により、前半は9人編成バンド。後半はジョー・ニューマン、ラッキー・トンプソンを含む6人編成でブルージーな演奏を聴かせる。

WPCR-29189 **[ATLANTIC]**

□ ミルト・ジャクソン『プレンティ・プレンティ・ソウル』

[1]プレンティ・プレンティ・ソウル／[2]ブギティー・ブギティー／[3]ハートストリングス／[4]サーモネット／[5]ザ・スピリット・フィール／[6]イグナント・オイル／[7]たそがれのブルース

ミルト・ジャクソン(vib)、ラッキー・トンプソン(ts)、フランク・フォスター(ts)、キャノンボール・アダレイ(as)、サヒブ・シハブ(bs)、ジョー・ニューマン(tp)、ジミー・クリーヴランド(tb)、ホレス・シルヴァー(p)、オスカー・ペティフォード(b)、パーシー・ヒース(b)、アート・ブレイキー(ds)、コニー・ケイ(ds)、クインシー・ジョーンズ(arr)

【録音】1957年1月5日、7日 ニューヨーク

ミルト・ジャクソンが残したブルージーな魅力溢れる傑作アルバムで、タイトルに示されているように、ここにはミルトの音楽の本質である"ソウルフル"な魅力がいっぱいに溢れている。アレンジャーとして当時、若手の俊才として注目を集めていたクインシー・ジョーンズが参加。メンバーの特性を生かしきった見事なペンさばきで、サウンドに統一感を与え、ドラマチックな緊迫感を生み出してゆくのも、じつに素晴らしい。

「ジャズ・ヴァイブの最高峰」のアトランティック第3弾は「ジャズ・テナーの父」との邂逅。同郷の逸材(フラナガン&バレル)の好演もあって、全編で格調高いデトロイト流ハード・バップが楽しめる。

WPCR-29190 **[ATLANTIC]**

□ ミルト・ジャクソン&コールマン・ホーキンス『ビーン・バグズ』

[1]クローズ・ユア・アイズ／[2]スタッフィー／[3]ドント・テイク・ユア・ラヴ・フロム・ミー／[4]ゲット・ハッピー／[5]サンドラズ・ブルース／[6]インディアン・ブルース

ミルト・ジャクソン(vib)、コールマン・ホーキンス(ts)、トミー・フラナガン(p)、ケニー・バレル(g)、エディ・ジョーンズ(b)、コニー・ケイ(ds)

【録音】1958年9月12日 ニューヨーク

"ヴァイブの魔術師"ミルト・ジャクソンと"テナー・サックスの巨匠"コールマン・ホーキンスという夢の顔合わせ。ジャズの何たるかを知り尽くしているふたりのプレイは、リラックスした中に優雅な風格を漂わせながら、それぞれが堂々たる個性を主張している。〈クローズ・ユア・アイズ〉やバラード〈ドント・テイク・ユア・ラヴ・フロム・ミー〉のたっぷりとした表情。ミルト作〈サンドラズ・ブルース〉の深い哀感。すべてが名演ぞろいである。

フリューゲル・ホーンとギターの繊細なコラボレイション。ピアノレス・カルテットを率いたトランペットの詩人アート・ファーマーの、リリカルな一面が堪能できる60年代の代表作。

WPCR-29191 **[ATLANTIC]**

□ アート・ファーマー・カルテット『インターアクション』

[1]酒とバラの日々／[2]バイ・マイセルフ／[3]マイ・リトル・スエード・シューズ／[4]エンブレイサブル・ユー／[5]マイ・カインダ・ラヴ／[6]サムタイム・アゴー／[オリジナルLP未収録曲][7]ローズ・オブ・ラヴ

アート・ファーマー(flh)、ジム・ホール(g)、スティーヴ・スワロウ(b)、ウォルター・パーキンス(ds)

【録音】1963年7月25日、29日、8月1日 ニューヨーク

抒情的な美しい響きをもつフリューゲル・ホーン・プレイを聴かせるアート・ファーマー。そんなファーマーが60年代の初めに、ギターのジム・ホールを加えて編成したレギュラー・カルテットによる最初のアルバムである。前年にアカデミー賞を獲得した映画曲"酒とバラの日々"をはじめとして、室内楽的ともいえるサウンドの中にメンバーの豊かな心の交流が感じとれる。ジャズ専門誌"ダウンビート"で5ツ星を獲得した名盤。

50年代の西海岸で大活躍したトランペッターとピアニストが双頭リーダーとなった超強力セッション。ウエスト・コースト・ジャズの真価を発揮した名盤。

WPCR-29192 **[ATLANTIC]**

□ コンテ・カンドリ&ルー・レヴィ『ウエスト・コースト・ウェイラーズ』

[1]恋人よ我に帰れ／[2]カムズ・ラヴ／[3]ラヴァー・マン／[4]ビートのアリバイ／[5]シェレモヤ／[6]ジョードゥ／[7]フラミンゴ／[8]マルシア・リー

コンテ・カンドリ(tp)、ルー・レヴィー(p)、ビル・ホルマン(ts)、リロイ・ヴィネガー(b)、ローレンス・マラブル(ds)

【録音】1955年8月16日、17日 ロサンゼルス

西海岸のビッグ・バンドでも大活躍を演じた名トランペッターのコンテ・カンドリ。テナーにビル・ホルマンを従えるとともに、ピアノのルー・レヴィーを加えて編成したクインテットによる演奏には、覇気あふれる即興プレイを繰りひろげたカンドリのホットな資質がよく表れている。〈恋人よ我に帰れ〉や、哀愁をもった〈カムズ・ラヴ〉のほか、デューク・ジョーダンの名曲〈ジョードゥ〉などもホットにプレイしている。

60年代半ばの混沌とした社会状況、退廃したムードを体現したハバード、アトランティック時代の代表作。ジャズ・ロックの表題曲の他、名ワルツ「アップ・ジャンプド・スプリング」の初演も収録。

WPCR-29193 **[ATLANTIC]**

□ フレディ・ハバード『バックラッシュ』

[1]バックラッシュ／[2]放蕩息子の帰還／[3]リトル・サンフラワー／[4]オン・ザ・キューティ／[5]アップ・ジャンプド・スプリング／[6]エコーズ・オブ・ブルー

フレディ・ハバード(tp, flh)、ジェームス・スポールディング(as, fl)、アルバート・デイリー(p)、ボブ・カニンガム(b)、オーティス・レイ・アップルトン(ds)、レイ・バレット(cga, bgo)

【録音】1966年10月19日、24日 ニューヨーク

ダンサブルなリズムに乗って、フレディ・ハバードやジェームス・スポールディングの鮮烈なソロがフィーチュアされるタイトル曲〈バックラッシュ〉。やはりロック・タッチの調子のよい〈放蕩息子の帰還〉に加えて、フレディのリリカルな面のよく出たオリジナル〈リトル・サンフラワー〉〈アップ・ジャンプド・スプリング〉と、まさにフレディ・ハバードのファンには魅力満載、こたえられない内容をもっているヒット作。

ルーレットにおけるラスト・セッションで収録された秀作。ミルドレッド・ベイリーの名唱で知られる「ロッキン・チェア」をカヴァー、サッチモの声色を模したゴールディも見事な助演。ヒューマニズム溢れる名盤。

WPCR-29194 国内初CD化 歌詞付 **[ROULETTE]**

□ ジャック・ティーガーデン『ミスター・Tの肖像』

[1]ミスター・Tの肖像／[2]ロッキン・チェア／[3]イン・ザ・ダーク／[4]ジャスト・フレンズ／[5]アップ・ア・レイジー・リヴァー／[6]バーボン・ストリート・パレード／[7]ハンドフル・オブ・キーズ／[8]言い出しかねて／[9]キーピン・アウト・オブ・ミスチーフ・ナウ／[10]アイム・ゲッティン・センチメンタル・オーヴァー・ユー

ジャック・ティーガーデン(tb, vo[2][4][5])、ドン・ゴールディ(tp, vo[2][5][9])、ヘンリー・クエスタ(cl, vib[8])、ドン・ユーエル(p)、スタン・パルス(b)、バレット・ディームズ(ds)

【録音】1961年1月29日～2月5日 シカゴ

1920年代末から一線でプレイをおこなってきたディキシー・トロンボーンの最高峰、ジャック・ティーガーデン。サッチモのオールスターズから独立してセクステットを率いた彼が、往時の名曲を演奏したアルバム。〈ロッキン・チェア〉〈アップ・ア・レイジー・リヴァー〉などでのヴォーカルをはじめ、いぶし銀のようなティーガーデンの個性が味わえる。64年に彼が亡くなってしまったあとにリリースされた、メモリアルにふさわしい一枚。

モダン・ジャズ・ドラミングのスタイルを確立、一時代を築きあげたローチが、バンド・リーダーとして、稀有なセンスと音楽的構成力を遺憾なく発揮した代表作。

WPCR-29195 **[ATLANTIC]**

□ マックス・ローチ『限りなきドラム』

[1]ドラム・オルソー・ワルツ／[2]ノンモ／[3]限りなきドラム／[4]セントルイス・ブルース／[5]シド・カトレットに捧ぐ／[6]イン・ザ・レッド(クリスマス・キャロル)

マックス・ローチ(ds)、ジェームス・スポールディング(as)、フレディ・ハバード(tp)、ロニー・マシューズ(p)、ジミー・メリット(b)、ローランド・アレキサンダー(ss [4])

【録音】1965年10月14日、20日／1966年4月25日 ニューヨーク

ドラマーとしてだけでなく、リーダーとして、たぐい稀な構成力をもつプレイヤーとしてのローチの実力がフルに発揮されている彼の代表作である。3つのドラム・ソロ演奏でローチは、まるでホーン楽器のようにドラムスを歌わせ、見事なストーリーを描き出す。コンボ演奏で、フロントを熱っぽく煽りながら作品をまとめ上げてゆくローチの手腕も素晴らしい。とくにブラッシュ・ワークで絶妙なサポートを聴かせる〈ノンモ〉は最高だ。

古くは江利チエミとの共演で知られる人気黒人コーラス・グループが、北欧ストックホルムで録音した貴重な音源をジュビリーで12インチ化。新旧ジャズの名曲を見事なハーモニーで聴かせた名盤の待望の初復刻。

WPCR-29196 国内初CD化 歌詞付 **[JUBILEE]**

□ デルタ・リズム・ボーイズ『イン・スウェーデン』

[1]バーディド／[2]アーリー・オータム／[3]イット・ハド・トゥ・ビー・ユー／[4]オール・アローン／[5]バードランドの子守唄／[6]イフ・アイ・ニュー・ゼン／[7]インディアナ／[8]ミッドナイト・サン／[9]ホイッフェンプーフ・ソング／[10]シャドラック／[11]オールド・マン・リヴァー／[12]クロエ／[13]ジェリコの戦い

デルタ・リズム・ボーイズ(chorus)、ルネ・デナイト(p)、ロルフ・ベルグ(g)、アルネ・ソダールンド(b)、アンダーシュ・バーマン(ds)他

【録音】1955年9月、10月 ストックホルム

ドゥ・ワップと呼ばれるヴォーカル・コーラス・スタイルの最高峰に挙げられるデルタ・リズム・ボーイズ。40年代から数々のヒットを飛ばしていった彼らが57年、ジュビリーに吹き込んだ珍しい作品で、トラッドなナンバーからジャズのスタンダードまで、洗練されたハーモニーとともに楽しく聴かせてくれる。世界的に人気を広めていった時代のスウェーデン録音で、アルネ・ドムネラスをはじめとする現地プレイヤーの好演も光っている。